

ミレニアムシティ コンセプトブック

市民がつくる

都市をつくる？

ミレニアムシティのキャッチフレーズは「都市をまるごとつくろう」。あなたはこれを見て、どのように感じますか。都市をつくる……ということがどういうことか理解しにくい方も多いのではないのでしょうか。そんなことが果たしてできるのだろうか。

多くの都市は権力によって作られてきたという歴史があります。日本でも、平城京、平安京を始めとして、幾多の城下町は時の権力者によって作られてきました。現在でも国や地方自治体が都市を作っています。ニュータウンや新都心と呼ばれるものです。それらは「お上」の発想で作られています。また現在では新しい権力＝経済が都市を作っています。大手の銀行とディベロッパーが利益を得るために団地をつくっています。そこでは経済性が最優先されます。現在の私たちは、都市というのは行政やディベロッパーがつくるものというイメージを持たされてしまっています。普通の人には都市をつくるということ自体が想像することすら難しいようです。

市民がつくる都市

しかし、南フランスのポールグリモのように、世界には市民が作った都市が存在しています。市民が都市をつくるということは無理ではないのです。最初から無理だとあきらめる前に、その必要性を理解し、可能性を検討し、実現性を夢見ることができるかもしれません。

「お上」や「経済」からつくられた都市に住む人は「住民」と言われます。語感としては都市に対する主体性があまり感じられない言葉です。「市民」とは主体的に都市に係わるという語感があります。市民の発想でつくる都市とは、いわばトップダウンではなくボトムアップの都市なのです。

ここでいう市民とは、日本ではこれまで希薄な概念だったかもしれません。いわゆる公民としての市民をさしています。個人の立場に立脚しつつ、公共の福祉や公益を発想することができる人のことです。

市民団体としてのNPO

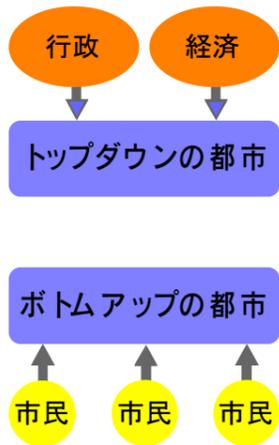
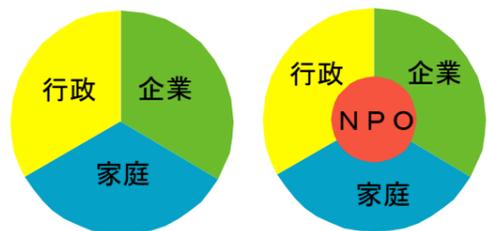
ミレニアムシティはNPO（民間非営利団体）として活動しています。NPOというとボランティア団体と思われる方が多いと思います。しかし、その存在の意義とは、これまで行政と営利企業と個人が担ってきた社会的役割に対して、市民として参加しその隙間をうめる活動をするということにあります。つまり、公民としての市民の立場に立って、公益的な仕事をするのがNPOなのです。

行政は多くの人の合意形成が得られることを前提として公益事業を発想します。それに対してNPOは、個々の生活する人の問題意識から公益的仕事を発想することができます。あるいはその発想や理念に共感する人々が集まり組織化が図られ事業が行われます。

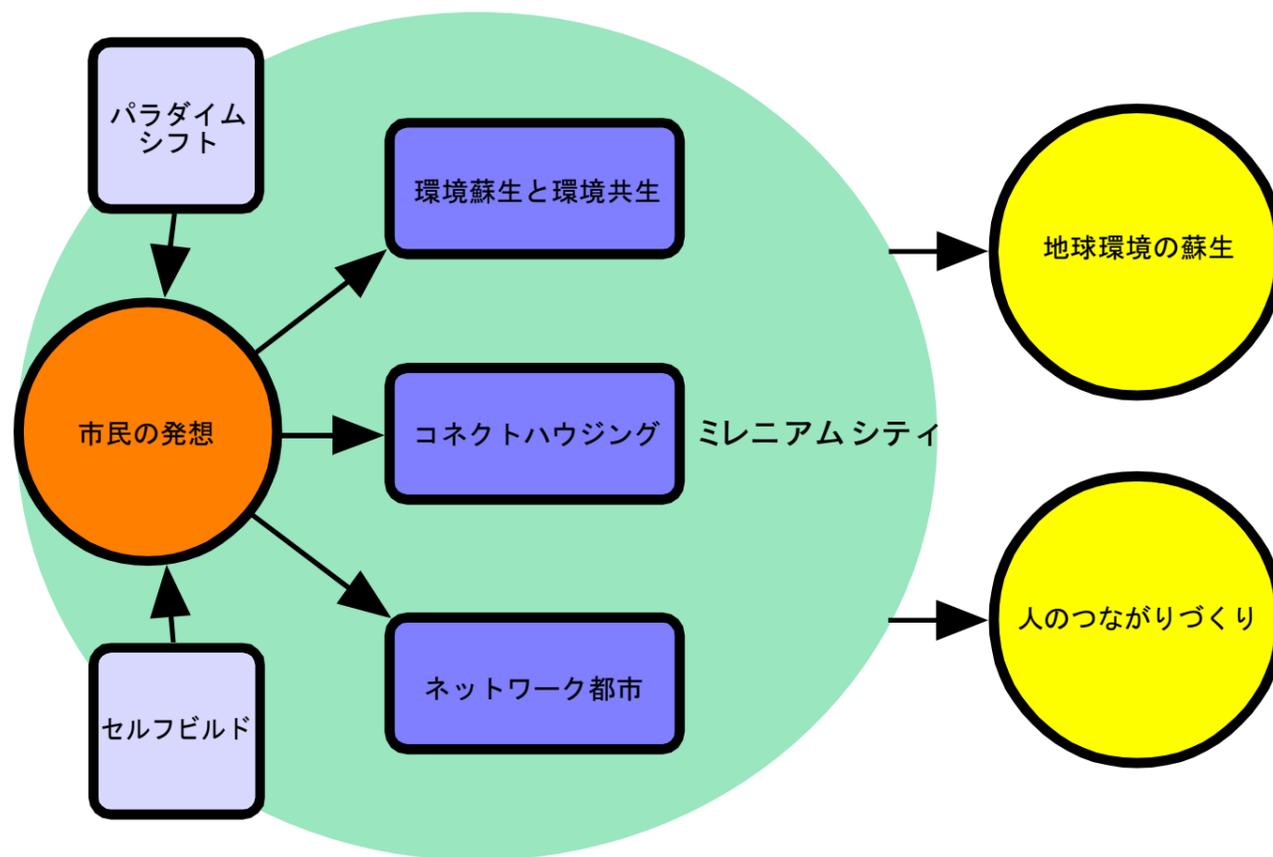
営利企業は資本を元に立ち上がり発展しますが、NPOは理念を原資に立ち上がり成長します。近年、社会構造の変化に伴ってこれまでの行政と営利企業と個人が構成してきた社会構造に隙間やひずみが出てくるようになりました。そこでNPOの必要性が高まり、次々と組織ができるようになってきたのです。

市民がつくる都市

ミレニアムシティがめざす「都市」とは市民がつくる都市です。まさしく生活者の問題意識から発想し、その理念に共感する人が集まり、組織化や事業化がなされることがめざされます。



ミレニアムシティの2つの目的



●設立趣旨

私たちは、文明・科学・経済の発展により、物質的な豊かさを手に入れました。しかし、その一方で、人と人とのつながりの希薄化による多くの心の問題を抱え、また地球規模の環境破壊も生み出してしまいました。

この活動は、身近な環境である住まいと都市を通して、新しい人間観、生活観をつくり、地球環境の蘇生化に取り組みながら、豊かな人間関係や自然環境をふたたび私たちの手に取り戻すことを目的としています。

ミレニアムシティとは、“市民が望む身近な環境を、自らの手でつくる都市”です。この都市に賛同した人々が集まり、自分たちの望む環境を考え、そして、実際に都市をつくり、そこにいっしょに住むことをめざしています。

ミレニアムシティには規模や立地の制限はありません。都市と言っても、ネットワークで結ばれた新しい都市像を想定しています。新しい産業構造や情報通信技術がそれを支えてくれることでしょう。

ミレニアムシティは参加者の理念によって実現することができます。最初の目標は2005年までにモデルエリアを実現することです。

ミレニアムシティの理念を判りやすく説明するために作られたのが、コンセプトブックです。このコンセプトブックの内容は、ワークショップにおける参加者の意見やアイデアがもとになっています。